

こころ

自然のすばらしさを求めて私は毎年夏になると高原生活をはじめ。勤務の間は休日を利用し、野菜の種まきや、苗の植付けをしに行く。長期の休暇にはいと連日高原生活ができるので、じっくりと自然の中にとけこめる。高原の澄んだ空を仰ぎ、両手を広げて深ぶかと呼吸をする。生きているよるこびを味わい、ありがたいと感謝の念がわく。

「自然」にみる「こころ」

毎朝広くもない畑をみまわる。花豆、いんげん、ねぎ、とうもろこし、きゅうりなどのようすをみたり、収穫したりするのである。土壌の栄養を吸い、太陽の光と熱と、霧、ここちよい風など自然の恵みを充分に受けて作物が育っていく。夕暮れど



藤 沢 寿

きにはまだ堅くて食べられそうもなかったきゅうりが一夜でぐーんと大きくなり、つややかな表皮にいきいきとしたとげをいっばいつけている。これを見るのが何よりのたのしみであり、またかくなるようにと願い一本一本、一株一株をたいせつにする。根本にからみつき成長を妨げるような邪魔な雑草を取り除いてやることを心がけている。

か細い桜の木が生い茂った樹々にかこまれて存在がわからなくなることがあった。枯れてしまったのではないかと案じていたら大木の間をすりぬけるように一本の枝が伸びて、時季になつたらきれいな花をつけていた。暗い茂みの中から光を求めて自ら道を拓いてのびてきた枝。日のあたる方へと伸びている

のには感心した。自由奔放に広がっている大木の枝を少しおろし、桜の枝がわざわざいされないように配慮してやった。翌年の五月、風とおしもよくなった木立の間から太くなった枝がぐんと伸び、ピンクの花がいっぱい咲いて高原の春をたのしませてくれたのである。

きゅうり畑を見まわりにいった。深く根をおろしてよく育っているのと、遅々として育たないものがある。育ちのよいものには支柱を立てて発育をたすけてやるが、育ちの悪いものには手入れも怠りがちになってしまう。

ある時、育たないきゅうりの茎をみつめながら、同じ条件で植え付けした苗なのに、どうしてこんなにちがうのだろうと見入っていた。その時私の掌中から、捨てようと思つて握つていたくず糸が一本たれてきゅうりのつるの先にふれた。とたんにきゅうりのつるは細い糸にくるくると巻きついたのである。私ははっとした。そしてそつと糸からつるをはずし、もう一度、今度は故意に糸をたらしつるの先にふれさせた。はなすまいとしがみつくようにつるは糸に巻きついた。きゅうりのつるはささえがほしかったのだ。それなのに育ちが悪いといつて見過ごし、求めているものを察知できなかった自分を恥ずかし

く思った。さつそくきゅうりに手をさしのべてやった。おくれさせながら小さな黄色い花が四つも咲いた。その一つが小さいいちいさい実をつけたのである。あの時、もう育たないだめなものとして抜き捨てていたらそれでおしまいである。ささやかながら黄色い花を咲かせ、実を結んだきゅうり、生命を全うしたのだ、とほっとした。農作業専門の人にはおよそとりあげてもらえないことかもしれないが、私はこうして自然から学び得る度に自分を反省し、幼児との生活に結びつけて考える。

保育のこころ

教師は心なくしてこどもをよく育てることはできない。走馬燈のようにくるくるまわる活動をとおして心の動きを察知し、うまく受けとめてやらねばならない。こどもが今求めているものは何か、をみきわめて対処していかなければならないと思うのである。ひとりひとりのからだを、心をたいせつにはぐまねばならないことは周知のことでありながら、これがなかなか実際には行なわれない面があるのでないか。先生という名のもとに指導という言葉や考えが先行してしまつて、こどもの発展的な自発活動を制御し、心をつかみ得ないで過ごすことがあるのではないかと思うことがある。

子どもの「うん」

● やりなおし

一組三十名足らずのこどもがいっしょに歌をうたっている。こどもも会出演のための練習である。歌の中に二、三人の話し声があった。先生の一喝がとぶ「おしゃべりしている人がいたからやりなおし」。ただその一言で誰もがおしゃべりをしないで歌った。「今度はよく歌えましたね」先生は満足した。こどもは満足しない。やりなおしという命令によって歌っただけである。活気もなければたのしさもない。先生は焦っているのだ。ちゃんと歌ってくれなければ自分の立場がなくなる。他の組と比較されて評価される。こんなことに頭をつかっているのではないのだらうか。こどもは先生のために歌ってやるのではないことをどの教師も知っているはずなのに……。たしかに歌の中のおしゃべりはいけない。やりなおしもよいであろう。しかしやりなおしをするならこどもの心をくんだあたか言葉かけがほしい。教師の一言によって楽しくもなり、つまらなくもなる。みんながたのしんで歌えたら、話し声もきこえないだろうし、歌うこどもの表情も明るく生気があふれる。こどもはおしゃべりをしないで歌えた、という自信と、歌う時はおしゃべりをしな

いで歌った方がたのしいというよろこびを感じる。

● おねがいます

予防注射の時、腕を出して校医の前にならぶ。「注射は痛いよ」「いやだなあ」などとさわめく。すわりこんでしまうこどももいる。「先生、痛い？」不安な面持で私にきく。私はいつもおなじように答える。「針をさすのですもの、ちょっとは痛いでしょうね。でもあなたががまんできないほど痛くないでしょうよ。がまんできないほど痛かったら大きな声で泣きなさいよ」それから一同には「お医者さんに『お願いします』ってやっていただくとなんにも痛くないものよ」ときかせる。実際その通りになる。次の注射の時から卒先して腕を出し「おねがいます」とひとり、ひとりの口から勇氣ある言葉が走る。

● 泣きたいだけ泣かせる

こどもがけがをしてくる。擦過傷、裂傷いろいろある。けがの状態によって取扱い方をかえる。擦過傷程度の場合でも「痛いよー痛いよー」と大げさに泣きわめくこどもがいる。こんな時「この位のけがで泣くなんておかしいわよ。がまんしなさい。男じゃないの。がまん、がまん」と元気づけながら手当をする

方法もあるようである。しかしがまんを押しつけるやり方に疑問をもつ。痛いから泣く、ばつが悪くて泣く、いろいろあるがこどもの身になって心から同情してやりたい。私は泣きたいだけ泣かせる方法でいく。けがをしたら大抵のこどもは泣く。痛くて泣くこども、痛くはないがばつがわるいので痛いということにこよせて泣くこどももいる。その場の態度や表情でわかるものである。私はいう「痛いでしょう。泣きたいだけ泣いていいのよ。でも痛くなくなったら泣きやみましようね」大抵はこれで泣きやむ。泣きやんだら励ましてやる。またこのように取扱われたらどうであろうか。もう泣くのはおやめなさい。泣いたってけがはなおらないのよ。お友だちに弱虫だなんて笑われますよ」その言葉に合わせてそばにいる友だちは「○○ちゃん弱虫だなあ」とのる。けがをして泣いた子、笑った子、心ない教師との間に何が育つであろうか。

●おまじないを唱えてやる

軽いけがだったら手当をしながら自己流の呪文を唱えてやる。「チリンポリン、チリンポリン痛いの痛いのとんでいけ」「はい、なりました」とこどもの顔をのぞく。こどもはありがとうというて晴れやかに離れていく。まだ晴れやらぬ表情のこと

もはそばのいすに腰かけさせてようすをみる。友だちとの交流がうまくいかないのか、甘えたいのか、まだ痛いのか、と心理推測をしたり、状況判断をしたりして適切な処置をすることに心がける。

●安心感を与える

大きなけがをしたこどもが抱きかかえられてくる。おともがぞろぞろついてくる。こういう時、けが人は泣くどころか声も出さず不安におののく方が多い。まず安心感を抱かせることが先決である。ぞろぞろわいわいの連中には単に「○○ちゃんがけがをしたのでみんなは向うで遊んでいなさい」といったただめ。「○○ちゃんのけがは大丈夫よ。先生がなおしちゃうから安心して向うで遊んでね」と周辺を静かにする。頭部であろうと、顔面であろうと、ひざがしらであろうと、いつ、どこでけがをするかわからない。そんな時教師がろうばいしたらけが人は不安になって急に泣き声をたてて母親を呼ぶ。「これぐらいの傷なんでもない、すぐなおるようにしてあげますよ」と出来るだけ平静な態度で処置をし、園での手当だけでよいか、専門医の手当を受けるべきかの状況判断をして、敏速に次の行動に移らなければならない。かりそめにも「あら大変、どうし

ましよう」などと不安な言葉をけが人にきかせたらいつそう動揺し不安がたかまる。心しなければならぬことである。このような時子どもは何を求めているのだろう。おそらく母親の暖かい手、抱擁してくれる愛情、心のささえを求めているにちがいないと思う。勇気つけてやることや不安感を少しでもやわらげる言葉かけが必要であろう。手当をしながら、どうしてけがをしたか、とか、気をつけて遊ぶのですよ、などいいきかせることは邪険な扱いでかえって邪魔になる。

私たちは先に生まれたということの先生ではなく、子どもと共に生活できるいわばからだも心もぶっつけていける保育者でありたい。幼稚園は子どもが生活するところ、自律心が育ち、自主的行動ができ、能力が啓発されるためには、満足な生活がなされねばならないことをいつも考える。

(前、千代田区立富士見幼稚園)

